『在りし日の歌』非収録の第二次「四季」発表詩篇からみえてくるもの

――「四季」における中原中也、中原中也における「四季」(2)――

加藤邦彦

一、

第二次「四季」が創刊されて以降、中原は毎号のように同誌に作品を発表した。その作品発表をまとめたのが【資料B】の「中原中也・第二次「四季」発表作品リスト」である。中原の生前に刊行された全三一号のうち、計二四号に中原の文章が掲載されている。二号連続で作品が掲載されなかったのは一度しかない。このような「四季」への関わり方をみれば、一九三六年の同人改編の際、中原が新しい同人として「四季」に迎えられたのは当然のことだったといえよう。そのことについては、続稿であらためて考えたい。

ところで、【資料B】をみていて気づくのは、第二次「四季」に発表された詩篇のうち、『山羊の歌』(文圃堂書店、一九三四年一二月)収録詩篇が少ないのは詩集の刊行時期から考えれば当然なのだが、そのわりには第二詩集『在りし日の歌』(創元社、一九三八年四月)に収録されていない作品が意外と多い、ということである。一般的な感覚だと、せっかく制作したのだから『山羊の歌』非収録の作品はすべて『在りし日の歌』に収録されてもよかったように思えるが、中原は第二次「四季」に発表したすべての詩篇を『在りし日の歌』に収録しようとはしていない。これは一体どういうことなのだろうか。

この『在りし日の歌』非収録詩篇の多さは、中原が第二次「四季」と並行して常時作品を寄稿していた雑誌「文学界」と比較すると、より際立つ。「四季」に発表された中原の創作詩全二四篇のうち、『在りし日の歌』収録作品は、詩集編集時に改作されて部分的に収録された「或る夜の幻想」を含めてもその六割に満たない一三篇しかなく、『山羊の歌』『在りし日の歌』どちらにも収録されなかった作品は九篇ある。ところが【資料C】の「中原中也・「文学

【資料B】中原中也・第二次「四季」発表作品リスト

▼第二次「四季」創刊号から中原追悼号にあたる第三二号までを順に並べ、それぞれに掲載されている中原の作品を示した。

▼表の列は、上から順に、第二次「四季」の号数、発行年月、発表作品名、『山羊の歌』への収録、『在りし日の歌』への収録、詩集非収録、再発表かどうか、創作詩以外かどうか、を示す。

▼第二次「四季」は雑誌に表記されている年月号と発行年月とがずれている。このリストで示した年月は後者。

号数	発行年月	発表作品名	山羊の歌	在りし日の歌	詩集非収録	再発表	創作詩以外
創刊号	三四・一〇	みちこ	○			☆	
第二号	三四・一一						
第三号	三四・一二	秋の一日	○			☆	
第四号	三五・一	【評論】近時詩壇寸感					○
第五号	三五・二	むなしさ		○			
第六号	三五・三	我がヂレンマ			○		
		【翻訳】烏・オフェリア					○
第七号	三五・四						
第八号	三五・五						
第九号	三五・六	倦怠			○		
第一〇号	三五・八						
第一一号	三五・九	夏の夜に覚めて見た夢		○			
第一二号	三五・一〇	詩人は辛い			○		
第一三号	三五・一一	青い瞳		○			
第一四号	三五・一二	除夜の鐘		○			
第一五号	三六・二	冷たい夜		○			
第一六号	三六・三	【翻訳】神は、私の生れる時……			○		
第一七号	三六・四	雪の賦		○			
第一八号	三六・五	独身者		○			
第一九号	三六・六	わが半生		○			
第二〇号	三六・八	夜更の雨		○			
		幼獣の歌		○			
第二一号	三六・九						
第二二号	三六・一〇	ゆきてかへらぬ		○			
第二三号	三六・一二						
第二四号	三七・一	郵便局			○		
		幻想			○		
		かなしみ			○		
		北沢風景			○		
第二五号	三七・二	或る夜の幻想		△	△		
第二六号	三七・四						
第二七号	三七・五	雨の朝			○		
第二八号	三七・六	蛙声		○			
第二九号	三七・七	【評論】デボルドーヴルモオル				○	
		【評論】詩集 浚渫船				○	
第三〇号	三七・九	初夏の夜に			○		
第三一号	三七・一〇	【評論】逝ける辻野君				○	
		【翻訳】サアディの薔薇				○	
		【翻訳】娘と山鳩				○	
第三二号	三七・一二	※中原追悼号					

【資料C】中原中也・「文学界」発表作品リスト

▼「文学界」復活号から中原追悼号にあたる第四巻第一二号までを順に並べ、それぞれに掲載されている中原の作品を示した。

▼表の列は、上から順に、「文学界」の巻号数、発行年月、発表作品名、『山羊の歌』への収録、『在りし日の歌』への収録、詩集非収録、再発表かどうか、創作詩以外かどうか、を示す。

▼文化公論社発行の創刊号―第二巻第二号（一九三三・一〇―一九三四・二）には中原の作品は掲載されていない。したがってリストから除外した。

号数	発行年月	発表作品名	山羊の歌	在りし日の歌	詩集非収録	再発表	創作詩以外
復活号	三四・六						
第一巻第二号	三四・七	【評論】詩と其の伝統					○
第三号	三四・八						
第四号	三四・九						
第二巻第一号	三五・一						
第二号	三五・二						
第三号	三五・三						
第四号	三五・四	春と赤ン坊		○			
		雲雀		○			
第五号	三五・五	朝鮮女		○			
第六号	三五・六	この小児		○			
第七号	三五・八	初夏の夜		○			
第八号	三五・九	夏の明方年長妓が歌つた			○		
第九号	三五・一〇	【翻訳】音楽堂にて					○
第一〇号	三五・一一	【翻訳】孤児等のお年玉					○
第三巻第一号	三六・一	含羞	○				
第二号	三六・二	冬の日の記憶		○			
第三号	三六・三						
第四号	三六・四						
第五号	三六・五	春の日の歌		○			
		【評論】思ひ出す牧野信一					○
第六号	三六・六	六月の雨	○				
第七号	三六・七	春宵感懐	○				
第八号	三六・八	思ひ出	○				
第九号	三六・九						
第一〇号	三六・一〇	秋の一日	○				
第一一号	三六・一一	幻影	○				
第一二号	三六・一二	言葉なき歌	○				
第四巻第一号	三七・一						
第二号	三七・二	また来ん春……	○				
		月の光	○				
		月の光　その二	○				
第三号	三七・三						
第四号	三七・四	冬の長門峡	○				
第五号	三七・五	春日狂想	○				
第六号	三七・六						
第七号	三七・七						
第八号	三七・八						
第九号	三七・九						
第一〇号	三七・一〇	正午	○				
第一一号	三七・一一						
第一二号	三七・一二	※中原追悼号					

界」発表作品リスト」をみてみると、「文学界」に発表された計二一篇のうち、『在りし日の歌』に収められなかった作品は「夏の明方年長妓が歌った」のわずか一篇きりなのである。もっとも、中原が第二詩集を構想し始めるのは一九三六年に入ってからのことであり[1]、常に詩集のことを念頭に置いて詩の雑誌発表が行われていたわけではもちろんない。また、中村稔が「『山羊の歌』『在りし日の歌』を作った中原は、ある考えがあってそこに収める詩を選んだんであって、自分の自信作をすべて詩集に入れるという考えではなかったんじゃないか」「『在りし日の歌』なら『在りし日の歌』としてまとめるのにふさわしい詩を中原の基準で選んでるんじゃないか[2]」と指摘しているように、全体の構成を考えた上であえて詩集から外された「自信作」もあったはずである。しかし、「四季」「文学界」発表作品の詩集収録数にこれほどの数の開きがあるとなると、結果的に両者の数に差が出てしまったと考えるよりはむしろ、「文学界」と「四季」に対する中原の意識に微妙な違いがあった、ととらえたほうが自然だろう。

では、両者に対する中原の意識はどのように違っていたのか。「文学界」との比較のなかから浮かび上がってくる中原の第二次「四季」に対する意識とは、果たしてどんなものだろう。そのことを考えるにあたって、両者と同時期に中原が多くの作品を発表していたもうひとつの雑誌、「歴程」についてまずは言及しておく必要があると思われる。

よく知られているように、中原は「四季」同人であると同時に「歴程」同人でもある唯一の詩人だった。そのため、「四季」における中原の活動、もしくは「歴程」におけるそれを考えようとする場合、もう一方の雑誌を参照し、その比較のなかから中原の個性を探っていくか、あるいは中原が両者の同人だったことを積極的に意味づけていくことが少なくない。前者の例として「「四季」「歴程」の二誌の中に置いて見る時、「歴程」の中の中原中也こそ、よりふさわしく、その作品は安定している[3]」とする小川和佑の論、後者の例として「中原中也がこういう「四季」と「歴程」の同人であったということ自体、まぎれもなく中也の独自性を示している[4]」と指摘する平岡敏夫の論を挙げることができよう。

もちろん、「四季」「歴程」両方の同人だったことは、まぎれもなくほかの詩人たちと区別される「中也の独自性」ではある。しかし、第二次「四季」に対する中原の意識を考えるに際して、わたしは「四季」の比較対象として安易に「歴程」を持ち出したくはない。なぜなら、一九三五年一〇月に創刊された「歴程」は、月刊誌である第二次「四季」や「文学界」と違って定期的には刊行されず、しかも中原の生前にはわずか五冊しか発行されなかったからである。詩人サークルとしての「歴程」はともかく、そのような不定期刊行の雑誌が、中原の意識のなかで「四季」や「文学界」と並ぶほどの重要な位置を占めていたかどうか。発表作品数の点からみても、中原がその五冊に発表した詩篇はわずか一〇篇しかなく、「四

季」と「文学界」それぞれに発表した作品数の約半分に過ぎない。[5]

渡邊浩史は「『四季』と『歴程』は明らかに相違する詩観を志向している」として、両者に発表された中原の作品に、その「詩観」に対応した「質的差異」をみいだそうとしている。[6] しかし、両者が「明らかに相違する詩観を志向している」とは後年からみたとき結果的にいえることであって、一方は「最初から明瞭な文学運動としての主張を持」[7]っていなかった雑誌、もう一方は次の号がいつ出るともしれない雑誌に対して、それぞれの「詩観」を意識しながら中原が作品発表を行っていたようにはわたしには思われない。[8] 仮に中原が「四季」との違いを意識していたとすれば、「歴程」よりも詩雑誌ではない「文学界」のほうにこそそれを意識していただろうし、そもそも「四季」や「歴程」に限らず、それぞれの雑誌の「詩観」や「志向」を意識して中原が発表作品を選んでいたかどうかもわたしには疑問だ。それぞれの傾向やそこに集う文学者たちの思想を気にしなかったからこそ、中原はのちに「詩人クラブ」と「東京詩人クラブ」という主義主張が明確に異なる詩人サークルのどちらにも参加することができたのである。[9] 中原が雑誌に対して何かを意識していたとすれば、せいぜいそれが詩の専門誌か総合的な文芸誌かということや、あるいはその雑誌のネームバリューぐらいだったのではないか。

興味深いことに、「歴程」に発表された中原の詩篇のうち、『在りし日の歌』に収録されなかったものの割合は「四季」以上に多く、発表詩篇の半数にあたる計五篇が詩集非収録である。[10] ここには、詩の専門誌である「四季」「歴程」と、小説、評論中心の総合的な文芸誌である「文学界」に対する中原の微妙な意識の違いをみることができる。安原喜弘は、もともと中原は「自分の原稿を所謂る文壇とか詩壇の家内発表機関に載せようなぞとは夢想もし」ておらず、「社会的な綜合雑誌によって正当に評価されること」「又それによって己の労作に対する正当な報償の支払われること」を望んでいたと述べている。[11] もちろん、右の三誌はいずれも「社会的な綜合雑誌」ではないし、中原が一九三六年四月一二日付の松田利勝宛書簡で「毎月タダの詩を発表するのにも疲れ」とぼやいているように、三誌以外も含めたほとんどの雑誌で「正当な報償」は支払われなかったらしい。しかし、雑誌の内容や世間からの注目度を考えれば、「四季」や「歴程」よりも「文学界」のほうがはるかに中原の希望に近かったはずである。とすれば、中原は「文学界」のほうにこそ重きを置いて、みずからが表現したいものや完成度が高いと思う作品を優先的に発表していたにちがいない。その結果が、「四季」「歴程」「文学界」にそれぞれ発表された詩篇の『在りし日の歌』収録作品数の差となって表れているのではないだろうか。

このことは、裏を返せば、「四季」や「歴程」は中原にとって完成度が高いと必ずしもいえない詩篇やみずからのほかの詩篇とはやや異なる詩風の作品を発表する場だった、ということでもある。渡邊浩史は、「ゆきてかへらぬ」や「散文詩四篇」、「或る夜の幻想」

などの「散文詩や短詩の連作構成の詩篇は、昭和一一年後期になって、中原が意欲的に始めた詩の形式の新しい試みであった[12]」という『新編中原中也全集』の指摘を受けて、「このような「形式の新しい試み」が『四季』発表の中原詩だけから見出せたことに我々は留意すべきだろう[13]」と述べている。続けて渡邊が指摘しているように、そのことが「発表詩が雑誌の主義主張と連動する関係性にあったということを如実に示している[14]」とはわたしは思わないが、中原が「四季」を舞台として「新しい試み」に果敢にチャレンジしていったという指摘についてはその通りであると思う。

右に名前が挙げられている作品のうち、「散文詩四篇」はいずれも『在りし日の歌』に収録されておらず、「或る夜の幻想」は改作された一部分のみが収録。唯一きちんと詩集に収録されているのが「四季」第二二号に発表された「ゆきてかへらぬ」であるが、初出時にはタイトルの下に「(未定稿)」と付記されていた。同様の例は「四季」第五号に発表された「むなしさ」にもみられ、この詩の初出時のタイトルにもやはり「習作」を意味する「(Etude)」という語が付されている[15]。一方、「歴程」にはこうした「新しい試み」や「(未定稿)」などの語句が示されている作品はみあたらない。とすれば、ここにこそ「四季」に対する中原の意識をうかがうことができるだろう。

中原にとって「四季」は、完成度が高いとは必ずしもいえないような作品、あるいはみずからのこれまでの作品傾向と違うような作品を発表することのできる、いわば実験の場であった。そのような雑誌だったからこそ、同誌に発表された詩篇には『在りし日の歌』に収録されなかったものが結果的に多くなってしまったと考えられる。一方、「歴程」がそのような実験の場とならなかったのは、先ほど述べたように同誌が不定期刊行であったこと、中原の生前にあまり多くの号が刊行されなかったことと関係があるのではないだろうか。詩を専門とする月刊誌だったからこそ、中原は第二次「四季」に実験的な作品を気軽かつ大胆に発表できたのだろうし、そこには詩人たちの集う場でみずからの「新しい試み」を問う意図もあったと思われる。そして、その試みはある程度の成功を収めたといえる。右で言及した「散文詩四篇」を「中原君がこんど出したやうに、四、五篇堂々と発表するしかた、大いにわが意を得たものだ[16]」と評価したのは、第二次「四季」の中心的な人物、堀辰雄であった。

ただし、ここで注意しなければならないのは、中原の詩業全体から考えた場合、第二次「四季」発表詩篇は今日的にみてそれほど評価が高くはない、ということである。もちろん「四季」に発表された詩篇のなかにも、「蛙声」や後述する「倦怠」など、佳品はいくつかみいだせる。右で言及した「ゆきてかへらぬ」も、そのうちのひとつに数えることができるだろう。しかし、「四季」に発表された詩篇を「文学界」のそれと比べてみると、やはり見劣りするといわないわけにはいかない。先にわたしは、中原はみずからが表現し

たいものや完成度が高いと考えている作品を優先的に「文学界」に発表したのではないかと述べたが、そのことを裏づけるかのように、「春と赤ン坊」「雲雀」「含羞」「六月の雨」「言葉なき歌」「また来ん春……」「月の光」「冬の長門峡」「春日狂想」など、今日的に完成度が高いといわれている作品、中原らしいと思われている作品は、「文学界」に集中してみられるのである。

第二次「四季」や「歴程」は中原中也という詩人の存在を詩壇に知らしめる役割を持っていた。小川和佑が指摘しているように、「「四季」「歴程」を発表の場に持つことによって、中原中也という文学雑誌の詩人は、ここで初めて詩壇の詩人となった」[17]（傍点原文）のである。しかし、その存在感は「四季」や「歴程」ではなく「文学界」に発表された詩篇においてこそ、よりはっきりと示されている。中原について「雑誌「文学界」の同人中で、ただ一人の詩人」[18]と述べたのは萩原朔太郎であるが、実際は同人ではない中原を朔太郎がそのように勘違いしてしまったのも、無理はないことであった。

二、

『山羊の歌』にも『在りし日の歌』にも収録されていない「四季」発表作品のなかには、詩集に収録されなかったことが惜しまれるようなものもいくつかある。そのうちのひとつが、一九三五年六月発行の第九号に発表された「倦怠」だ。一時は『在りし日の歌』への収録が考えられていたらしいが[19]、結局この詩は同書に収録されなかった。以下に全文を引用する。

倦怠の谷間に落つる／この真ッ白い光は、／私の心を悲しませ、／私の心を苦しくする。／／真ッ白い光は、沢山の／倦怠の呟きを掻消してしまひ、／倦怠は、やがて憎怨となる／かの無言なる惨ましき憎怨……／／忽ちにそれは心を石と化し／人はただ寝転ぶより仕方もないのだ／同時に、果されずに過ぎる義務の数々を／悔いながらにかぞへなければならないのだ。／／はては世の中が偶然ばかりとみえてきて、／人はただ、絶えず慄へる、木の葉のやうに／午睡から覚めたばかりのやうに／果然（ママ）たる意識の裡に、眼光（まなこ）らせ死んでゆくのだ

詩集非収録のため、この詩について論じたものはそれほど多くないものの、作品自体の評価は決して低くはない。たとえば、中村稔は「作品の全体として、イメージのふくらみを欠いている」としつつも、作品が進むにつれて「詩人」は「倦怠した心」に「息苦しく迫って」いき、最終的にその「心」を「木の葉のように絶えず慄えながら、四海の生起する事象を偶然とばかりみながら、呆然と、しかも「眼光らせ」死んでゆくほかない」という「不気味な情念にまで追いつめてゆく」のと比較すると、「「朝の歌」も「臨終」もまことに典雅な抒情詩であるという感を否めないのではないか[20]」と述べている。

また、第二次「四季」への発表当時、この詩を高く評価したのは萩原朔太郎である。朔太郎は、中原から「前に寄贈された詩集」では「巻尾の方に収められた感想詩体のものが、僕にとつて最も興味深く感じられた」と述べた上で、この詩を次のように評している。

今度の「倦怠」はこれとちがひ、相当技巧的にも凝つた作品だが、前の詩集（山羊の歌）とは大に変つて、非常に緊張した表現であり、この詩人の所有する本質性がよく現れて居る。特に第三聯の「人はただ寝転ぶより仕方もないのだ。同時に、果されずに過ぎる義務の数々を、悔いながらかぞへなければならないのだ。」の三行がよく抒情的な美しい効果をあげてる。「山羊の歌」の中原君に対して、少しく微温的な不満を感じて居た僕であるが、今度の「倦怠」には讃辞を呈する。おそらくこれが、この詩人の本然してゐる道なのだらう。[21]

朔太郎も中村と同じくこの詩の持つ緊張感を高く評価しているが、その点についてはまったく同感である。特に最終連では、その緊張感のなか、「偶然ばかり」の「世の中」で自分が意志的に行うことができるのは「眼光らせ死んでゆく」ことしかない、という「私」の壮絶な覚悟が歌われていて、わたしたちの胸を打つ。ただ、「前の詩集（山羊の歌）とは大に変つて」と朔太郎が指摘している点については、誤解であるといわなければならない。「倦怠」の最終連は、「私は希望を唇に噛みつぶして／私はギロギロする目で諦めてゐた……／噫、生きてゐた、私は生きてゐた！」という『山羊の歌』所収の「少年時」の最終連とつながっており、詩想的にはやや異なっているものの、生およびその反動としての死をみつめている点、意志的に何かを諦めようとしている点で両者は共通している。また、この詩の題名ともなっている「倦怠」は、『山羊の歌』に集中してみられるテーマで、『在りし日の歌』にはほとんどみられないものである。[22] もしかすると、この詩が『在りし日の歌』に収録されなかったのは、そこにこそ理由があるのかもしれない。

ところで、『在りし日の歌』非収録の「四季」発表作品のなかに、気にかかる詩篇がもうひとつある。一九三五年一〇月発行の第一二号に発表された「詩人は辛い」という作品だ。

私はもう歌なぞ歌はない／誰が歌なぞ歌ふものか／／みんな歌なぞ聴いてはゐない／聴いてるやうなふりだけはする／／みんなたゞ冷たい心を持つてゐて／歌なぞどうだつたつてかまはないのだ／／それなのに聴いてるやうなふりはする／そして盛んに拍手を送る／／拍手を送るからもう一つ歌はうとすると／もう沢山といつた顔／／私はもう歌なぞ歌はない／こんな御都合な世の中に歌なぞ歌はない

この詩が発表されてから数年後、土方定一は「書かれた詩と、朗読を予想され、言葉の音感に美はしい感覚の持たれた朗読される詩、歌はれる詩、の二つが少なくとも現代詩のうちにある」[23]と指摘した。その「歌はれる詩」の実作者として、土方は中原の名前を挙げているが、[24] 右の詩篇は土方のいう「歌はれる詩」を否定したよう

な作品ではもちろんない。この詩の主眼は、いうまでもなく「みんな歌なぞ聴いてはゐない」ことに対する「詩人」のつらさの表明にある。とりわけすぐれた詩であるとは思わないが、対人関係における孤独感、疎外感が平易な言葉で綴られていて、中原らしい作品といえる。

それほど有名ではないこの作品が、一九九七年、突如として注目を集めた。それは、中原中也記念館が行った「私の好きな中原中也の詩」というアンケートで、一〇代が選んだ詩の第一位にこの作品が選ばれたからである。「詩人は辛い」とともに、やはり詩集非収録の「酒場にて」も一〇代の上位に選ばれているが、教科書にも採録されていないこれらの詩篇がアンケートの上位に来ていることに、関係者は驚きを隠せない。

中原　意外だったのは、「酒場にて」と「詩人は辛い」ですね。ちょっと伺いますが、中高生というのは特定の県ですか。

福田　はい。新潟と北九州でクラスでまとめてでしょうか、そういう風にして応募して下さったところがあります。両方とも生徒の感想がその二つの詩に集中していて、そして両方とも先生方は特に指導してないとおっしゃる。だから、生き方とかいのちとは何かとか、多分子供たちにとってそれはなかなか捕まえどころがなかったんでしょう。そういう時にこの詩に出会うと、生徒たちはここに代弁されていると感じ、そういうところに共鳴して感想を書いたんでしょうとおっしゃるんです。(中略)

中原　多少思うのは、「詩人は辛い」は疎外感を歌っている。それから「酒場にて」にもやはり疎外感があるわけです。周りの人になじめない、周りの人から誤解されるという。でも自分はこうなんだ、これが自分なんだ、自分らしくありたいというのは最近の若者の傾向でもありますよね…。[25]

中原豊が指摘しているように、この詩で歌われている内容は「最近の若者」の感覚と合致しているようにみえる。本音を隠し、表面的にしか人と付き合わない「みんな」に対して、真摯に「歌」を歌っていた「私」は距離を感じ、いらだつ。おそらくその点に、「最近の若者」たちは親近感を覚えたのだろう。「御都合な世の中」であるのは、当時よりむしろ現在である。また、今日的な評価の高さについて考える場合、この詩の「私」がタイトルによって「詩人」と規定されていることを見逃すわけにはいかない。そのことが、この詩の背後に中原中也という作者の存在を感じさせ、この詩に対する親近感をますます抱きやすいものにしているのではないだろうか。

この詩の背後に感じられる作者の存在。確かにこの詩を歌う「詩人」のイメージは、わたしたちの知っている中原中也の姿と重なっている。野々上慶一は次のように証言する。

中也は、飲んでいて、時に突如として自作の詩を、嗄れた、しかし、しっかりとした声で、また時には悲し気な声音で、抑揚をつけて、朗誦したりしました。いまでもその姿が目にうかび

ます。そして、いつもまだ雑誌などに発表しない新作の詩を、披露していたようです。いま思えば、『在りし日の歌』に収められた詩の多くです。しかし、中也の朗読がはじまると、みなイヤな顔をして、座は白けたものでしたが、そして私もまたはじまった、とその時は迷惑に思ったものですが、歳月はふしぎなものです。私はいまでは時々、このことをとてもなつかしく思い出すことがあります。[26]

野々上の証言は、まさに「詩人は辛い」で歌われている内容と合致している。とはいえわたしは、「詩人は辛い」の「私」が実在した中原中也という詩人と同一人物かどうかということや、どうして「詩人は辛い」という作品が現代という時代に好評を持って迎えられたかということについて、ここで考えたいわけではない。ここで注目したいのは、この詩の「私」が明らかに「詩人」という肩書きを持つ人物だということ、しかもこのような作品が詩の専門誌である第二次「四季」に発表されたという事実についてである。そのことは、中原や「四季」に依拠する詩人たちにとってどのような意味を持っていたのか。

まず確認しておかなければならないのは、「四季」への寄稿に際して、その文章を読むのが詩人たちであることを中原は意識していた、ということである。一九三五年一月発行の「四季」第四号に掲載された「近時詩壇寸感」に、中原は次のように書いている。

人によつて色々異ることと思ひますが、私は詩に就いては自分に分るやうにだけは考へますが、それを人に分らせようとするや大変骨が折れます。而も骨を折った結果は、大抵の場合自分は気拙くなり、相手には殆んど役に立たないやうな次第です。これは、一つには私が今迄に、詩人である人と余りおつきあひして来なかつたといふことに過ぎないのかも知れません。もし相手がやはり詩人である場合は、随分容易に話が通じ、又互ひに利するのかも知れませんが、今の所私は、詩論といふものは殊(ママ)んど無益だと諦め切つてゐる有様です。

右の文章は、これを読む人たちが「やはり詩人である」という前提に立って書かれている。中原が詩人たちに読まれることを意識して「四季」に発表する文章を書いていたということ。とすれば、中原は「四季」に発表する詩が自分以外の詩人たちに読まれるということも当然意識していたにちがいない。

詩人たちに読まれると、「詩人は辛い」という詩の意味合いは大きく変化してくる。すなわち、「四季」という読み手も書き手も詩人ばかりの雑誌に掲載されることで、「詩人は辛い」という作品は、「詩人」である「私」の「歌」と同時に、「四季」に依拠している詩人たちの「歌」としての意味合いも持つようになっていくのである。

中原がこの詩を「四季」に発表したのは、「私」と同じ詩人たちならこのような「私」の不遇を理解してくれるかもしれない、という淡い期待を抱いてのことだったのではないか。また、この詩は

「歌なぞどうだったってかまはない」と思っている人ばかりの「ご都合な世の中」で、それでも「歌」を歌おうとしている詩人仲間に向けた、中原なりのエールであったのではないだろうか。言い換えれば、中原はこの詩を「四季」に発表することで、孤独でつらいのはあなただけではない、というメッセージを「四季」の読み手であり、書き手でもある詩人たちに送っているのである。

その一方で、詩人たちの集う雑誌に発表されたという観点から「詩人は辛い」について考える場合、この詩の持つアイロニカルな面にも注意しなければならない。この詩では、「もう歌なぞ歌はない」とはいいながらも、じつは「歌はない」ことが歌われている。その自虐的な内容は、詩を書かない読者にとっては悲壮感あふれる決意に感じられる反面、「歌はない」ことが歌われているという点でかなりユーモラスに響くが、当時の読者、すなわち第二次「四季」に依拠する詩人たちには、この詩はどのように映っただろうか。資料に乏しいので推測するしかないが、「御都合な世の中」であることを特に気にせず「歌」を歌っている詩人たちにとっては、この詩の内容は自分たちに対する批判と受け取られかねないし、にもかかわらず「歌はない」ことを歌っている「私」のアイロニカルな態度は、そのような詩人たちの感情を逆なでしただろう。さらにいえば、「歌」を聞く機会がもっとも多いのは、今も昔も変わらず、みずからもまた「歌」を歌うもの、すなわち詩人たちなのである。とすれば、この詩で歌われている「みんな歌なぞ聴いてはゐない／聴いてるやうなふりだけはする」とは、詩に無関心な世間の人々に向けた不満であると同時に、じつはこの作品を読んでいる詩人たちに対する皮肉ともなっているのだ。

「詩人は辛い」は「四季」に依拠する詩人たちに、孤独でつらいのはあなただけではない、というメッセージを送った。しかし、その裏には「みんな歌なぞ聴いてはゐない」ことに対する批判やアイロニーが隠されている。詩人たちの集う第二次「四季」という雑誌に、詩人たちへの批判とも取れるこのような内容の詩を中原が発表しているのは、わたしたちからみればいかにも中原らしいが、そこに依拠する詩人たちにとっては、やはり異様で不気味に感じられただろう。中原が「裏に弁証論的な諷刺やイロニイを隠してゐる」ことを見抜き、「懐中に短刀を入れてる子供の図」を、この詩人の風貌から感ずるのは、決して僕一人ではないであらう[注7]」と評したのは、「詩人は辛い」と同様、『在りし日の歌』非収録の「倦怠」を高く評価した詩人、萩原朔太郎であった。

（つづく）

注

（1）『新編中原中也全集』第一巻「解題篇」角川書店、二〇〇〇年三月、一九一―一九四頁参照。

（2）中村稔・樋口覚「徹底討議　詩史としての中原中也」、「ユリイカ」第三二巻第八号、青土社、二〇〇〇年六月、一六四頁。

（3）小川和佑『「四季」のその詩人』有精堂出版、一九六九年一二月、三〇頁。

(4) 平岡敏夫「「四季」「歴程」と中原中也　一九三〇年代の抒情のなかで」、「国文学　解釈と教材の研究」第二八巻第五号、学燈社、一九八三年四月、五五頁。

(5) 「寒い！」「北の海」「閑寂」「童女」「深更」「白紙」「お道化うた」「冬の明方」「はるかぜ」「あばずれ女の亭主が歌った」の一〇篇。このうち、『在りし日の歌』に収録されているのは「北の海」「閑寂」「お道化うた」「冬の明方」（詩集では「冬の明け方」と改題）「あばずれ女の亭主が歌った」の五篇である。

(6) 渡邊浩史「メディアの要請に応える詩――『四季』『歴程』における中原詩の特質をめぐって――」、「京都語文」第一三号、佛教大学国語国文学会、二〇〇六年一一月、一二八頁。

(7) 小川和佑、前掲書（3）、二―三頁。

(8) もちろん、中原本人は意識せずともこれらの雑誌、特に「歴程」のイメージの形成に中原の詩は大いに荷担しているだろう。

(9) 拙稿「中原中也の「詩壇」意識――一九三五年前後の詩をめぐる状況と「日本詩人会」「詩人クラブ」「東京詩人クラブ」」、「中原中也研究」第七号、中原中也記念館、二〇〇二年八月参照。

(10) 注（5）参照。

(11) 安原喜弘『中原中也の手紙』玉川大学出版部、一九七九年四月、四三―四四頁。

(12) 前掲書（1）、三一三頁。

(13) 渡邊浩史、前掲文（6）、一三七頁。

(14) 同右、同頁。

(15) 大岡昇平は「中原はあまり自信のない作品を雑誌に発表する時、Etudeと書き添える癖があった」と述べているが、雑誌発表された詩篇にこの語がみられるのは、「むなしさ」と「道化の臨終（Etude Dadaistique）」（「日本歌人」一九三七年九月号）の二篇のみである。「『中原中也全集』解説」『大岡昇平全集』第一八巻、筑摩書房、一九九五年一月、三六五頁。

(16) 一九三七年二月一一日付神保光太郎宛堀辰雄書簡。『堀辰雄全集』第八巻、筑摩書房、一九七八年八月、一二七頁。

(17) 小川和佑、前掲書（3）、三〇頁。

(18) 萩原朔太郎「詩壇の新人」、「文芸通信」第五巻第二号、文芸春秋社、一九三七年二月、四八頁。

(19) 前掲書（1）、四一四頁参照。

(20) 中村稔『中原中也　言葉なき歌』筑摩書房、一九九〇年一一月、一三―一四頁。

(21) 萩原朔太郎「詩壇時感」、「四季」第一〇号、四季社、一九三五年八月、二九頁。北川透もこの朔太郎の評を取り上げて、「倦怠」は「たしかに朔太郎の指摘のようにいい作品である」にもかかわらず、「中也はどういうわけか、この朔太郎の時評を絶対読んでいるのに、「倦怠」を詩集『在りし日の歌』からはずしている」と疑問を呈している。「新人、中原中也の可能性　一九三〇年代と今日」『中原中也論集成』思潮社、二〇〇七年一〇月、一九八頁。

(22) 拙稿「倦怠と幻想――中原中也『山羊の歌』『在りし日の歌』の再検討――」、「論集」第四二号、梅光学院大学、二〇〇九年一月参照。

(23) 土方定一「歌はれる詩」、「歴程」第一七号、八雲書林、一九四二年四月、一三頁。

(24) 拙稿「歌曲・朗読・ラジオ放送――中原中也像の形成に即して――」、「早稲田大学大学院文学研究科紀要」第四六輯第三分冊、早稲田大学大学院文学研究科、二〇〇一年二月参照。

(25) 和田健・中原豊・横田昌子・福田百合子「座談会　私の好きな中

原中也の詩」、『天使の手帖〜私の好きな中原中也の詩　一、〇〇〇人アンケート〜』中原中也記念館、一九九七年一〇月、一六頁。

(26) 野々上慶一「『山羊の歌』のこと」『さまざまな追想　文士というさむらいたち』文芸春秋、一九八五年一月、二三頁。

(27) 萩原朔太郎、前掲書（18）、四八頁。

※本稿は、「日本文学研究」第四四号（梅光学院大学、二〇〇九年一月）掲載の「第二次「四季」創刊前後の中原中也――「四季」における中原中也、中原中也における「四季」（1）――」の続稿である。また、本稿の続稿「第二次「四季」にとって中原中也の存在意義とは何だったか――「四季」における中原中也、中原中也における「四季」（3）――」が「日本文学研究」第四五号（二〇一〇年一月発行予定）に掲載予定である。ご併読いただければ幸甚である。なお、中原中也の文章は、角川書店版『新編中原中也全集』を本文とし、適宜各掲載誌を参照した。引用に際し、一部を除いて旧字体は新字体にあらため、ルビは省略した。